

# 水辺の思考の表裏、北欧ヴァイキング／アイルランド修道僧

## —科研費報告 III—

木 原 誠

### The Norway Vikings and the Irish Monks—

Makoto KIHARA

#### 要 旨

免疫システムの作用は可視化されることはないが、一度、身体内にウィルスが侵入すれば、免疫活動は活発化し、その侵入の痕跡を印として残す。こうして病患のあとに残る腫れ物＝しるしを分析することで、システム全体の働きを検証することが可能となる。そこで重要な意味をもってくるのが、八世紀の終わりから九世紀初頭にかけて、修道院文化共同体内部に深く侵入し、その共同体に決定的打撃を与えたヴァイキング（ノルウェイ・ヴァイキング）が残した軌跡である。つまりこのヴァイキングの学術共同体内部への侵入経路を辿っていく行程をとおして、逆説的に水辺のネットワーク全体の仕組みが解明できるというわけである。なお、本論は近日刊行予定の『水辺の思考／アイリッシュ・マニエリスム』の「第五章」に相当する部分の抜粋である。

獅子の咆哮、狼の遠吠え、嵐の海の狂乱、破壊する剣、それは人間の眼にとってあまりに大きな永遠の一部である。……ウィリアム・ブレイク『天国と地獄の結婚』

彼らはこれを荒地としてしまった。その荒地がわたしに向かって嘆くのだ。全地は荒地にされた。しかし、ひとりもこれを心に留めるものはいない。……「エレミヤ書」

投げかけよ 汝の心を かの過ぎ去りし日々に 来たるべき日々に われらがなおも不屈のアイルランド人であるために ……W. B. イェイツ「ベン・ブルベンの麓で」

#### 一：〈フィヨルドの水賊〉、北欧ヴァイキングと水辺の思考

四世紀～六世紀にかけて民族の大移動が起こり、北方民族は西ローマ帝国に侵入し帝国を滅ぼした。やがて彼らはヨーロッパに定着し各々国をつくっていった。これにより大陸ヨーロッパの地勢図は一変する

ことになった。またそれに伴って、その地図のうえの文化形態も大いに変化を被ることになっていった。大陸ヨーロッパにおいて各々の民族文化は異文化と未知との遭遇を果たし、相互に文化変容を遂げ、新しいヨーロッパの地図を形成していったからである。とはいえ、この歴史的展開を促した基軸、それは古代ローマ帝国の拡張運動を展開させたもの、それをそのまま継承したものにすぎなかった。そのため基軸それ自体はほとんど変化を被ることはなかった。もちろん、その基軸とは陸路の思考である。彼らはおもに陸路を利用して大移動を進め、陸地で戦いを挑み、各々その地で勝利し、大陸内で各々領土を分け合うことになっていったからである。つまり〈陣取り合戦〉というゲームのルール、そこに変更はなんらなかったわけである。

これに対し、九世紀～十一世紀にかけてヨーロッパ大陸を荒らしまわった北欧ヴァイキング、その水辺の思考は彼らにとって未知との遭遇であっただろう。したがって彼らの思考の基軸である陸路の思考、そこに大きな影響をおよぼすことは避けられなかった。つまり〈陣取りゲーム〉のルールそのものが変更を余儀なくされたわけである。海岸線、離島、河川、湖のルートを使って奇襲攻撃を仕掛けてくる捷破りの彼らの戦術、それは陸路仕様に特化し、これによってしだいに進化・発展を遂げてきた大陸ヨーロッパの思考、その前提を覆すに十分なものであり、それは彼らにとってまったく未知の思考だったということになるだろう。

とはいえ、この未知の思考は、実は七世紀に新しくヨーロッパ大陸の覇者となったフランク王国がすでに遭遇していたはずの思考であった。すなわち海岸線、河川、湖畔沿いに修道院を創設したアイルランド修道僧たち、彼らとの深い文化交流を通じて習得してしかるべき思考であった。ただその時の彼らは、〈良き訪れの使者たち〉のもつ高い知性と清貧を重んじる敬虔なる信仰に新鮮な驚きを覚えたものの、その背後で働く優れた思考を見抜くまでの知性と感受性を持ち合わせてはいなかったのである。

幸福のなかで暮らす者は自身の幸福、その〈源〉がなんであるのか、深く想いをめぐらしてみることがない。それが人のつねというものだろう。むしろ人はその幸福が奪われ、不幸に見舞われたときにこそ我が身を省みる。そしてそのときはじめて自己の幸福、その源泉に出逢う（気づく）ことになる。フランク王国は、水辺を伝って侵入してくるヴァイキングに遭遇したとき、アイルランド修道僧たちがあえて人里離れた水辺を選んで修道院を創設した理由に気づき、そのときはじめて彼らが有する優れた文化的叡智、水辺の思考に出逢うことになったのである。

だが、「時すでに遅し」というほかないだろう。歴史が証言しているように、彼らによって七～八世紀、フランク王国にもたらされたメロヴィング・カロリング朝ルネサンス、それは九世紀初頭のヴァイキングの侵略によって終焉をむかえることになったからである。アイルランド系修道院の最後の灯火も時を同じくするように、そのとき完全に消えてしまった。もちろん、それはフランク王国そのものの滅亡を意味するものではなかった。だが王国の知の文化は、その後しばらくの間、蛮化の一途を辿ることになってしまったのである。このこともまた歴史上の事実として受けとめなければなるまい。

九世紀初頭に同時に発生したこれら三つの歴史的出来事、すなわちヴァイキングの侵略、カロリング朝ルネサンスの消滅、アイルランド系修道僧たちの霧散、それらは認め難い一つの真実を指し示している。すなわち一方は平和の訪れを告げる使者であるアイルランド修道僧たち、他方は戦争の訪れを告げるヴァイキング、両極をなす思考。それが実は水辺の思考という同じ根株から芽吹いた種を同じくする植物、その別の表われにすぎなかったということである。一方が水辺に可憐に咲く〈知と精神の花〉だとするならば、他方がその〈仇花〉であったということにでもなるだろう。

このことは、ヨーロッパ全土を荒らしまわった北欧ヴァイキング、その歴史がいつどこからはじまったのか、それを想起するならば、さらに理解がいくことになるだろう。そのはじまりは、アイルランド系修

道院の侵略に求めることができるからだ。したがってこの出来事を、歴史のたんなる偶然とみることはできないはずである。アイルランド修道僧たちは水辺の思考に導かれて全土に次々と修道院を建てていった。同じように、ヴァイキングたちは水辺の思考という羅針盤を頼りに侵入・侵略の見取り図を描き、それにしたがって次々と彼らが建てた修道院を襲撃していった。こうして彼らは成功を手中に収めることになったのである。

そういうわけで、アイルランド襲撃の戦略を立てることは、彼らにとってそれほど難しいものではなかった。修道僧と思考を共有するヴァイキングは、彼らの思考を裏返しにすればそれでよかった。それだけで〈宝島の地図〉、すなわち水辺のネットワークの地図を容易く描き上げることができたのである。一方、大陸ヨーロッパの侵略においては、その思考は陸路の思考により描かれたヨーロッパの地図、その死角をおのずから突くものとなる。そのため彼らが奇襲作戦を行う際、水辺の思考はきわめて有効な戦略として機能することになったのである。

そうだとすれば、北欧ヴァイキングを航海術に長けた「海賊」と定義するだけではあまりに不十分だということになるだろう。彼らは入江や河川や湖水という水路を大船・小舟で大陸内を縦横無尽に巡走する〈水賊〉でもあったからである。「ヴァイキング」の語源の一つとされているものが、「入江」を意味する「ヴィーク」であり、つまり彼らは「入江の人」であったことに注目したい。<sup>1</sup>もちろん、その場合の「入江」とは水河によって形成された北欧フィヨルドのことであり、したがって彼らを他の様々なヴァイキングたちから区別するために、〈フィヨルドの水賊〉と呼ぶことが相当であるといえるだろう。

## 二：北欧三国のヴァイキングと水辺の思考

一般的には「フィヨルドの水賊」たちは、「北欧ヴァイキング」としてひとまとめに呼ばれることしばしばである。だが、彼らは当時北欧の領土を三分割する各々国家（領土）をもつ異なる民族であり、歴史的背景も各々異なるものである。したがって、そこには当然のことながら各々違いもあった。すなわちノルウェイとデンマーク（デーン）とスウェーデン、各々のヴァイキングはそれぞれ区別されるのであり、各々侵略の経路も戦略もまた異なるものであった。<sup>2</sup>

そこでまずは、ノルウェイのヴァイキングから考えてみることにしたい。「ノルウェイ」の原義は“north way”、「北の道」である。<sup>3</sup>年の半分が雪と氷に閉ざされた寒冷の地、そこは農耕にはまったく適していない。彼らはフィヨルド沿いのわずかな平野—ハムレット王子がいう「猫の額ほどの土地」—で農耕を営んでいたのである（だからこそ、『ハムレット』で語られているように、彼らはこの「猫の額ほどの土地」をめぐる互いに領土を奪い合ったのではあるまいか）。もちろん、それだけではとても暮らしていくことはできるはずもない。そこで彼らは貿易に活路を見出すことになっていった。

貿易のため旅立つのは、雪と氷が溶ける春の到来を待ってからのことである。種植えを終えて、出稼ぎの商船に乗り込むのである。ノルウェイ・ヴァイキングの本来の意味が「北の海のルート」を通して貿易を行う「（フィヨルドの）入江の人」であるのはそのためである。実際、ヴァイキング化するまえの彼らは、北の海路を通じて当時宝石作りに珍重されていた琥珀などを中心に、高度な鑄造技術によって製造した鉄鋼品や工芸品—その意味でも彼らの文化はアイルランド文化と大いに共通点がある—や北欧の毛皮を輸出し、その交換品を他の港の市場に運び込み、それを高値で売る仲買によって生計を立てる「入江」の貿易商人であった。<sup>4</sup>しかも彼らはヴァイキング行為を行うようになったあとでも、貿易商人としての一面をけっして忘れることはなかったのである。

貿易商人である彼らにとって、「北の海路」は生命線そのものであった。もちろん、「北の海路」とは、北海を含めた大西洋航路のことである。その意味でも、彼らの行動パターンは、古代・初期中世アイルラ

ンドと重なるものがある。

彼らが暮らす領土の「河川はほとんど航行できなかったが、フィヨルドは航行にとって理想的なものであり、大西洋海岸線に沿って点在する小島のベルト地帯はある種の避難所の役目を果たしていたのである」（『ダブリンとヴァイキングの世界』）。<sup>5</sup>彼らが大陸ヨーロッパを侵略する場合、「外周り」すなわち大西洋航路を好み、その際、まずは小島から侵略した理由がこのことによって説明できる。

ノルウェイがハーラル王により統一国家が成立したのは八七二年のことであり、それまでは当統一王国が成立していなかったこともあり、小グループを形成し侵略のターゲットを絞ったうえで略奪を試み、その後、すぐに引き上げるという〈ヒット・エンド・ラン〉方式を取ることが多かった。<sup>6</sup>彼らは組織的な集団を形成しない「私的な冒険者」（海野弘『海賊の文化史』）<sup>7</sup>であったために、アイルランド侵入においては、大掛かりな侵略戦争を仕掛けことは避けており、したがって当初彼らは植民地化を企てる戦略をとることはなかった。

七九四年から八〇七年までの初期ヴァイキング、その襲撃の対象地点は、おもに海岸線に近い小島や海岸沿いの小地域にかぎられるものであった。つまり、初期の段階においては、このヴァイキングたちは海岸線に直結する河川や湖を通じてアイルランド本土まで侵入を試みることはなかった。<sup>8</sup>

八〇七年から八一三年にいたる次の段階においては、ヴァイキングたちは小規模ではあるものの、本土へ侵入し掠奪を試みる戦略へと徐々に移行していった。彼らはまず小さな離島に侵入し、そこを拠点に本土の入江に侵入し、河川や湖を伝って小規模な修道院を略奪し、そのあと長居することなくすぐに退却し、河川・湖に点在する葦が生い茂る小島を転々としながら、つねにその拠点を換えることで隣接する修道院に奇襲攻撃を繰り返すという方法をとっていた。シャノン河、ポイン河、バロー河流域などには彼らの侵略の爪痕が多く残っている。これらの河川を通じた襲撃の年ははっきりしていないが、この段階のものも多く含まれていると考えてよいだろう。

ただし、この段階における彼らの侵略は、八一一年のアルスターへの襲撃に対する「アルスター軍の勝利」に窺われるように、目立った成果を収めることはほとんどなかった。<sup>9</sup>このことは、八一四年から八二〇年の段階において、ヴァイキングの襲撃が一時沈静化していることから察しがつく。八一九年にブレガの修道院の襲撃には成功しているものの、その地は海岸沿いにあった点にも留意したい。

そういうわけで、アイルランドを一つの国土と考えた場合、アイルランドはヴァイキングという外敵を文字通り〈水際対策〉によって阻止することに成功したということになるだろう。

だが、かりに当時のアイルランドを水辺のネットワークという〈免疫システム〉によって結ばれた一つの修道院共同体だと想定するならば、彼らの襲撃はその共同体にとって致命的な打撃を与えたことになった。そのネットワーク・システムの要は内陸の中央にあるわけではなく、周縁の海岸線沿いおよびそこに隣接する小島にこそあったからである。中央集権的な思考によって編まれた中央都市から放射線状に広がる陸路の物流のネットワークとは異なっており、それは周縁的な思考に基づいて周縁の四隅にあたる海岸線から内陸へと向かって編まれた水路の知のネットワークだったことを思い出したい。つまり、周縁こそ水辺のネットワークの中心・中央だったことになる。だが皮肉なことだが、その周縁の四隅の海岸線に浮かぶ小島こそが初期ヴァイキングたちの格好の標的にされてしまったのである（後述）。

最後の段階は八三九年、アルスタ地方（北アイルランド）のネイ湖の占拠にはじまる。その時、彼らはそこに要塞を建設し、六十隻の軍艦を停留させることにした。そしてはじめてそこで冬を過ごすことになった。このことはすでに「第一章」で述べたとおり、彼らの思考が水辺から陸路へと変化したこと、その象徴的な意味合いをもつものである。こうして陸路の思考に目覚めた彼らは、八四一年にはダブリンを侵略し、そこにヴァイキングによる新しい街を建設することになったのである。

その後、デンマークのヴァイキングが侵入することで、両者はしだいに衝突することになっていった。アイルランドの国王たちはデンマーク・ヴァイキングと手を組んだため、ダブリンは三つ巴の戦場と化したのであるが、その勝利者は彼らであった。アイルランド修道僧たちは最初の侵略者である彼らを「白い異教徒」と呼んでいたという。<sup>10</sup>

さらにその後、ノルウェイ・ヴァイキングたちはアイルランドとイングランドを南下し、フランスに侵略の対象地を求めていくことになった。この点について、海野弘はその著書『海賊の文化史』のなかで以下のようにうまく纏めて述べている。

北フランスではフランク王国がデンマーク・ヴァイキングが戦っていた。ノルウェイ人はそれを避けて、フランス西岸を南下し、ロワール川河口から侵入した。八四三年に、ノルウェイ人ウエスファルディングがロワール河口で栄えた港町ナントを掠奪した。そして河口の小さな島に陣取り、この地方の塩や葡萄酒の交易を握った。<sup>11</sup>

このことからすぐにもわかるとおり、彼らはアイルランドだけではなく、大陸ヨーロッパにおいても、水辺の思考に導かれるように、水路を利用しながら侵略を行っていったのである。しかも、彼らの思考のネットワークは六～八世紀のアイルランド修道僧たちと同じように、大西洋文化圏を見据えたものであった。この点は興味深いところである。だが改めて考えてみるまでもなく、それは当然の経緯であったといえる。ノルウェイの領土、スカンディナヴィア半島西部はノルウェイ海と北海に面しているものの、内海ではない。したがって名称の異なる二つの海は実のところ大西洋の一部なのであり、それらが異なる名称をもつのは国境なき海を区分するための便宜上の一つの記号にすぎないからである。つまり、アイルランドとノルウェイはともに大西洋文化圏の一部とみることができる。だからこそ、ノルウェイ・ヴァイキングはアイルランドを侵略できたのであり、その後北大西洋に浮かぶ大陸、アイスランドにまで侵入・侵略することができた。あるいは彼らははるか対岸の巨大な大陸である「ヴィンランド」、すなわちアメリカ大陸にまで侵入することができたのである。彼らは大陸ヨーロッパが「死の海」と呼ぶ大西洋、その特性を知り尽くしていたからである。

アイスランド・サガが記す「ヴィンランド伝説」が歴史上の事実であったことは、一九六〇年代、カナダで発見された北欧人の居住地跡の調査結果が証しているとおりでである。そうであるならば、彼らと同じ大西洋文化圏の一部にして水辺の思考を共有するアイルランド、その修道僧の一人、六世紀の聖ブレンダンが大西洋を渡りアメリカ大陸にまでたどり着いたという伝説も、一部歴史上の事実であると受けとめることができるだろう。少なくとも、この伝説のほうが〈極西の絶海の孤島伝説〉などよりも、はるかに歴史的に信じるに値するものである。実際、このことを裏づけるように、マーティン・W. サンドラーは以下のように記している。

しかし、最初に大西洋を渡った航海者の一人であるこの実在の船乗り[聖ブレンダン]が、六世紀半ばに現在のフェロー諸島に到着し、さらにシュトランド諸島とアウトター・ヘブリディーズ諸島を訪れたのはほぼ間違いないと言える歴史的根拠が存在している。(『大西洋の歴史』)<sup>12</sup>

むしろ、サンドラばかりが聖ブレンダンの伝説、それが歴史上の真実であると主張しているわけではない。さらなる根拠も提出されている。たとえば、みずからのフィールドワークをとおして、このことを裏づけることに成功した例もある。その一例というのは、以下のものである。

アイルランド在住の冒険家であるティモシー・セヴェリン (Timothy Severin) は、『聖ブレンダンの航海』の記述にしたがって、忠実にみずからオークの樹脂でなめした牛皮で覆ったカラッハを再現した「聖ブレンダン号」を作り、その小舟で一九七六年五月十七日に四人の乗組員とともに、ディングル半島を船出し、フェロー半島に辿り着いた。その後、三ヶ月後の七月にアイスランドのレーキャビック港に到着した。さらにその後、一九七七年五月七日にアイスランドを出港し、大西洋を航海して同年六月二六日、ついにカナダのニューファウンドランドの沿岸の無人島に到着することに成功している。こうして彼は『聖ブレンダンの航海』に描かれているものが架空の物語ではなく、ある程度事実に基づいて記されたものであったことを見事に裏づけたのである (ティモシー・セヴェリン、『ブレンダンの航海一皮の小舟で大西洋を渡る』参照)。こうしてアイルランド修道僧たちとノルウェイ・ヴァイキングたちが大西洋文化圏を同じくする住人たちであったことが、彼の冒険によっても検証されたわけである。

ノルウェイ・ヴァイキングが大西洋をたえず意識していたこと、このことは彼らの大陸ヨーロッパ侵略の経路からも理解することができる。フランス西岸を南下しロワール川河口から侵入した彼らは、次にデンマークと共同戦線を張ってイベリア半島へ向かったからである。

艦隊はジブラルタル海峡を抜けて、地中海に入り、南フランスに達した。そしてローヌ川河口のカマルグ島を占領した。八六〇年に北イタリアのピサを掠奪した。ヴァイキングは地中海でも海賊活動を行ったのである。(海野弘)<sup>13</sup>

この航路は、古代アイルランド文化および六世紀半の修道僧たちに高度な知を伝播した水辺のネットワークの大動脈、大西洋／地中海航路であることを思い出すならば、必然的なものであったといえるだろう。

一方、アイルランド修道院が「黒い異教徒」と呼ぶデンマーク・ヴァイキングの場合はどうだろうか。その際にまず注意しておくべきことは、当時のデンマークは、現代のデンマークの領土であるユトランド半島 (ユラン) だけではなく、スウェーデン南部すなわち「スコーネ」を領土としていたという点である。すなわち当時のデンマークの領土は、『ハムレット』の種本ともいべき『サクソ・グラマティクス』のなかに描かれている「英雄アムレット」が活躍したかの「デンマーク」であるということになるだろう。先王ハムレットがノルウェイに勝利して得た領土とはスコーネの一部であると考えられるからである。つまり、彼らの領土はスカンジナビア半島も一部含まれていたということである。

「白い異教徒」であるノルウェイ・ヴァイキングとは異なり、「黒い異教徒」である彼らは、当初からきわめて組織的な大掛かりな侵略行為を好んだ。彼らの領土はヨーロッパに囲まれた大陸の舳先、かの「ハムレット城 (エルシノア城)」があるユトランド半島であったため、組織的戦略が必要であったとみることができる。それゆえ彼らは大きな港を狙い、軍隊との衝突も辞さなかった。<sup>14</sup> 彼らの最終目標はノルウェイ・ヴァイキングのように各島に秘蔵された財宝の掠奪ではなく、当初から領土の侵略と植民地化だったからである。その意味で、シェイクスピアが『ハムレット』の舞台をノルウェイではなく、むしろノルウェイに対峙するデンマークに設定したことは、「海賊国家」と化した当時のイギリスの事情を承知し、それをデンマーク型ヴァイキングのイメージに重ねるための適切な文学的な判断であるといえる。

のちにノルウェイ・ヴァイキングもこの戦略を習得し、掠奪に満足することなく領土を占領しそこに基地を建設し、それを拠点に侵略を行っていく方法をとるようになっていった。すでに述べたとおり、ノルウェイ・ヴァイキングによるダブリンの占領と植民地化は彼らの戦略に倣って行われたものである。

彼らの大陸ヨーロッパにおける侵略の経路は、ノルウェイ・ヴァイキングとほぼ重なっている。そのた

めときにダブリンの侵略にみられるように、二つのヴァイキングが衝突することになった。だが、ときにはイベリア半島の侵略のように共同で侵略を行うこともあった。

この二つの重なり合う経路からもわかるとおり、彼らもまた水辺の思考の共有者だったわけである。ただし、彼らの侵略航路がおおむね〈内周り〉であることから、ノルウェイ・ヴァイキングと比較した場合、大西洋文化圏の意識はかなり薄かったのではないかと推測される。

スウェーデン・ヴァイキングの場合はどうだろうか。彼らは小国が分立していたために、統一王国が成立するのは、十世紀のエリック王の時代を待たなければならなかった。当時の彼らの領土は先述したとおり、南部はデンマーク領であったのだが、現在のフィンランドは彼らの領土であった。そのため、古くから彼らは大西洋ではなく、バルト海沿岸に目を向け、その東部との交易を行っていた。そういうわけで、そのヴァイキングが東方の大陸の奥地に向かったのも当然の経緯であるといえるだろう。侵入ルートは東のヴォルガ・ルートと西のドニエプル・ルートである。ヴォルガ・ルートはバルト海を渡り、フィンランド湾からネヴァ河口に入り、ラドガ湖へといたり、そこからオネガ湖からヴォルガ河にまで辿りつく。ドニエプル・ルートはラドカ湖からノブゴロドを通り、その南のイリメニコ湖を渡り、ドニエプル河上流にまで達することができた。河川が途切れる区域では船を引っ張っていったという。<sup>15</sup> このようにみると、スウェーデン・ヴァイキングは大西洋航路を利用した痕跡はまったくないとみることができる。それでも以上のルートから判断して、彼らもまた水辺の思考を共有する人々であることだけは理解されるのである。

### 三：ノルウェイ・ヴァイキングの侵略経路のもつ意味

以上述べたことを考慮し、総合的に判断するならば、計測不可能なほどの数にのぼるヴァイキングたちによるアイルランドへの侵入・侵略経路、そのなかで本考にとってもっとも重視すべき経路はおのずから消去法によって絞られることになる。つまり初期（八世紀末）のノルウェイ・ヴァイキングの掠奪経路、ここに求められるということである。その理由は以下のものである。

バルト海に目を向けたスウェーデン・ヴァイキングはアイルランドの掠奪行為とは無縁であった。デンマーク・ヴァイキングの場合はどうだろうか。彼らはアイルランド海を通じてアイルランドに侵入・侵略し、その侵略によりアイルランド史は一変することになった。彼らの侵略を抜きにして、ダブリンをはじめとする国際交易の拠点としての「都市」の成立は考えることができない。

むしろそれは、彼らがノルウェイ・ヴァイキングのように直接的に領土を占領・支配したことを意味しているわけではない。ただし先述したように、当初「ヒット・エンド・ラン」の戦略法を取っていたノルウェイ・ヴァイキングに、侵略・占領の戦術を習得させたのは彼らであり、また王族と手を結ぶことでアイルランドの都市化を促したのは彼らの功績であるといつてよい。もちろん、このことは彼ら以上にノルウェイ・ヴァイキングに当てはまるものである。

そういうわけで、アイルランド史におけるヴァイキング研究の関心は、侵略のあとにデンマーク／ノルウェイ・ヴァイキングが占有化した領土、その社会的な変化やそれを拠点に他の領土に侵略していったその軌跡の問題に集まるのも当然である（ただし、アイルランド占有化後のヴァイキングの動向は、「白」と「黒」すなわちノルウェイ人とデンマーク人と明確に区分することができないほど入り乱れている点に注意したい）。そしてもちろん、このような研究が歴史的に重要な意味をもっていること、このことについてはここで改めていうまでもない。

だが、アイルランドの水辺の思考をテーマとする本書にとって、そのような問題はほとんど意味をもたない。それどころが、逆に探究の妨げにさえなりうる。この点については、ここでははっきりと述べておか

なければならない。アイルランド定住後の彼らの侵略経路、それをいくら精密に辿ってみたところで、その経路がもはや水辺の思考を反映しているとは考えられない以上、水辺のネットワークの見取り図を描く際、それはただ混乱を招くばかりだからである。

組織的な行動をとるようになったヴァイキングの侵略の目的は、掠奪ではなく領土の占有化のほうに向かった。一度、領土の一部を占拠した彼らの関心は、まずは占領地を死守すること、つまりアイルランド側からの逆襲に備える戦略のほうに移っていった。それは、当時のアイルランドの王族たちが抱いていた関心、それを内部と外部からの視点とみなして裏返しにすればよいだけのことである。したがって、本質的には両者の思考、そこになんら変わるところはない。彼らは占領地に城塞を設け、さらなる侵略に際しては、その経路をかならずしも水路に求める必要がなくなっていった。侵略・占領後の彼らが陸路を使った戦いが次第に多くなっていったことは、その一つの根拠である。

このことが意味しているのは、彼らが本来有していた水辺の思考、それが陸路の思考のなかに完全に包摂されてしまったということにほかならない。彼らは〈占有地〉という〈猿毘のバナナ〉を掴ままま手放すことはなかった。そのために皮肉にも、陸路の思考の「捕虜」になってしまったという次第である。古代よりアイルランドでは、王権を維持するための戦略として、他国の王家の一族から捕虜をとる方法をとっていたのだが、彼らは占有化によって、我が身を陸路の思考に対する捕虜として差し出すという皮肉な結果を招いてしまったのである。

その証拠として挙げるべきは、彼らが一度領土を奪うやいなや、その地を要塞化することに努めているという事実である。アイルランド定住後の彼らの侵略経路を辿ってみたところで、水辺のネットワークの見取り図の作成の一助とはならないとみるのは、この理由による。

そうだとすれば、本考にとってもっとも重要な意味をもつものは、その発生期に相当するノルウェイ・ヴァイキングの侵略経路、そこに完全に絞られることになるはずである。したがって以下、この観点からノルウェイ・ヴァイキングの侵略の軌跡を辿っていくことにしたい。

#### 四：ヴァイキングの発生、リンデスファーン修道院襲撃

ノルウェイ・ヴァイキングの発生は、アイルランド系修道院の侵略からはじまる。彼らが最初に侵略のターゲットにしたのは、スコットランド東海岸、ヘブリーデス諸島の一つ、現在では「ホーリー・アイランド聖なる島」と呼ばれているリンデスファーン修道院であった。時は七九三年のことである。<sup>16</sup>

この修道院は聖コロンバが創設したアイオナ修道院の僧侶、聖エイダン（Saint Aidan）が六三五年に十二人の弟子（修道僧）たちとともに創設したものであるとされている。<sup>17</sup> 彼が十二人の弟子とともにこの地に修道院を建てたことは、彼らがカルディの伝統を継承していたことを暗示している点で興味深いものがある。すでに述べたとおり、師を含む十三人が一組で諸国を巡礼するのが「カルディ／ケリ・デ」の巡礼の伝統なのであり、それを海外の地においても、彼らはけっして忘れることなく継承していたとみることができるからである。

この修道院はケルト三大装飾写本の一つ『リンデスファーン福音書』が制作された場所として広く知られている。このことは、おのずからリンデスファーン修道院がアイオナ修道院の強い影響を受けていることを示唆するものである。聖コロンバによって制作がはじまったとされるアイオナ修道院の聖書の装飾写本、『ケルズの書』にみられる写本技術および芸術様式、その同じ方法がここでも用いられていることがその証左となるだろう。ちなみに、ケルト三大写本の一つ『ダロウの書』、その制作場所は聖コロンバが創設したアイルランド北東部オフェリー州にあるダロウ修道院である。これがたんなる偶然の一致ではないとすれば、三大写本はいずれも聖コロンバの影響のもとに、当初、制作されていたことになるだろう。



この修道院が聖コロンバ系の修道院であったことは、聖エイダンの経歴からみても明らかである。彼は聖コロンバの郷里（現在のドニゴール州周辺）に近い大西洋沿岸地域であるコノハト地方出身のアイルランド人であったとされている。彼はコロンバの衣鉢を継ぎ、水辺の思考という羅針盤を携えてスコットランド全土を巡査し、最終的にリンデスファーン修道院をスコットランドの東海岸線に創設したのである。<sup>18</sup>

二つの修道院が各々スコットランドの東西の海岸に位置していること、この点はアイルランドの水辺のネットワークの形成と拡がり、その経緯・経路を辿っていくうえできわめて重要な意味をもっている。そこで以下少々紙幅を割くことになるが、この点についてももう少し掘り下げて考えてみることにしたい。

聖コロンバを心の師と仰ぐ聖エイダン（二人の生存の時期から判断して彼が聖コロンバの直接の弟子であるとみることはできない）、彼のアイルランド修道僧としての志は、師の偉業が終わったところからはじまったとみることができる。聖コロンバの献身的な働きによって、当時「ピクトの異邦の地」と呼ばれたスコットランド、その西部海岸線にアイルランド系修道院の拠点をつくることができた。これにより、アイルランドの水辺のネットワークはアイルランド海、その対岸にまで拡がりをみせていくことになっていった。とはいえ、その地の東部地域は未開発のまま残されていたのである。もし東海岸にアイオナ（聖コロンバ）系の修道院を創設することができるならば、その知のネットワークは西部から東部にまでおよぶことになり、それは一つの海を挟んで対岸の地の広範囲におよんでいくことになる。

聖コロンバは自身が王家出身であることの利点を活かし、この地の王たちを説得してアイオナ修道院を建てることに成功した。その際、彼はアイルランド修道会の伝統、すなわち「逃れの場」として修道院を位置づけることを忘れることはなかった。アングロ・サクソン七王国の一つ、ノーサンブリア王国の王が殺され、逃亡する王子オズワルドをアイオナ修道院に匿したのも、彼が築いたこの大いなる〈逃れの場の伝統〉の遺産によるものであると見てよいだろう。やがてその王子がノーサンブリアの王に即位すると、オズワルド王はエイダンを招聘し、彼は王の命を受けて城の近郊に修道院を六三五年に創設している。それがリンデスファーン修道院である（この経緯についてはベアダの『英国民教会史』にも詳しく記されている）。<sup>19</sup> こうして、スコットランドにおける水辺のネットワークは西から東へと拡がっていった。

チャールズ＝エドワーズによれば、「エイダンの布教の影響によって、学問の研鑽と修道生活のために、かなりの数のイギリス人がアイルランドに渡ってくるようになった」のだという。<sup>20</sup>あるいは『英国民教会史』（一六九―七〇頁参照）にもこの経緯について記されている。

つまりアイルランドの水辺のネットワークは東西の海岸線を拠点にもつことによって、スコットランド全土を包括するまでに、その範囲を拡げていったことになるだろう。そうだとすれば、西から東に向かって拡がっていくことになった水辺のネットワーク、この方向性こそ彼が師から受け継いだ数々の衣鉢のなかで最良のものであり、彼がアイルランド系修道会に対して果たした最大の功績の一つであるといえそうだ。

聖コロンバはアイルランド北西部出身、コノハトを支配する北イ・ニール王国の王子であった。その彼は、修道僧の身でありながらクール・ドゥレムネの決戦を指揮し勝利をおさめた。だが同時に、この戦いにより多数の屍がベン・ブルベンの麓に、彼が建てた修道院の周囲に積み重なってしまうという悲惨な結果を招いてしまうことになった。しかもこの戦いにより、彼自身もその身体に生涯消えることのない「天使の鞭傷」を刻印されることにもなった。罪の呵責に苛まれる彼は、その贖罪のため「自己追放」の国外巡礼の旅に出ることを決意する。その旅路はアイルランドの西に位置する郷里からはるか東に位置するスコットランドに向かうものであった。つまり彼の贖罪巡礼は西から東への経路を辿ることになったのである。

チャールズ＝エドワーズによれば、この経路は聖パトリックの布教の経路とちょうど逆になっているのだという。<sup>21</sup> 聖パトリックがアイルランド人により誘拐された地は、おそらく聖コロンバが布教を開始したダリ・リアタ王国の辺境にあたる地域ではなかっただろうか（ただし、一説によれば、彼が誘拐された場所は現代のウェイルズだったという）。その彼は両親の待つ地（その地がイギリスであったのかどうか、専門家の間でいまだ意見が分かれている）に戻ったあと、『告白』のなかで記しているように、幻のなかで「フォクレーの森」から響く「アイルランドの声」を聞く。「フォクレーの森」はアイルランドの「極西の地」、現在のクレア州の大西洋の海岸線付近だとされている。こうして布教のためアイルランドに渡ることを決意した彼は、ティレハン（Bishop Tirechain）の『聖パトリックに関する覚書』によれば、ダブリンから数マイルの南にある東海岸に上陸することになったという。そこから彼は「世界の西の果て」（『告白』）、「フォクレーの森」を目指して西に向かうことになった。彼は中央平原を横切りアイルランド西部にあるシャノン河の南部流域に着き、その河を北上しコノハト、さらにドニゴールに、その海岸線を周回してアントリムに到着した。そして再び中央平原に向かうことになったのである。つまり聖パトリックの布教の軌跡は、おおむね聖コロンバのそれとは逆に、東から西の経路を辿っているということになるだろう。

ただし、その経路において一点気になることがある。ティレハンの『覚書』にしたがうならば、彼の布教の旅路はアイルランド北西部で終わったわけではないからである。彼の旅路は北部の海岸線に沿って北西部から東部のエバン・マッハのあるアーマー教会に向かっている。したがって、彼の最初の目的地が大西洋海岸線に面する「フォクレーの森」であるとひとまず措定してみるならば、むしろその旅路（布教）のはじまりは西であるとみることができるのである。

聖パトリックにかんする多くの伝説もこの見方を大いに後押しするものである。それらによれば、彼の布教のはじまりは、大西洋の海岸線に面する北西部に位置する「クロー・パトリック山」での「四〇日間の荒野の断食苦行」のあとであるという。これはキリストの「四〇日間の荒野の断食苦行」のあとの布教開始に対応するものであるとされる。それならば、彼の真の布教の経路は北西部の大西洋沿岸からタラの丘やアーマー教会のある東部へ向かったということになるだろう。

このように仮定するならば、聖パトリックの辿った軌跡は聖コロンバの巡礼経路とほぼ重なっていることになる。とはいえ、この方向性が問題にされることはさきわめて少ない。その主な原因の一つとして挙げるべきは、アイルランド研究にみられる〈東部中心主義〉あるいは〈パックス・タライズム（ダブリンを首都に置くアイルランド型中央集権主義）〉によるバイアスであるとみることができまいか。

このことが意味しているのは、大陸のみならず水辺の地アイルランドにおいても、日はつねに東から昇り、西に沈むという〈オクシデンタリズム〉がその文化・研究においても、いまだ支配しているという実情である。アイルランドの中央集権／陸路の思考の表象ともいべき東部の「タラの丘」、そこに立って「シャムロック」を掲げ、そこで「三位一体」を説く聖パトリックのイメージ、そればかりがことさら強調されているのも、この東部中心主義のバイアス、その一環であるみることができる。しかもその場合の「三位一体」とは、聖パトリックをアイルランドの最初のカトリック布教者であることを前提としている以上、聖アウグスティヌスすなわちカトリックが正統とする（大陸の）「三位一体」を前提にしているということになるだろう。

だが、すでにみてきたように、旧石器時代から青銅器時代を経て初期修道院時代にいたるまで、〈大西洋文化圏のなかのアイルランド〉、そこにおいては文明の周行はむしろ極西の沿岸から昇り東の地へと沈んでいったのである。その周行に変化が起こったのは七～八世紀頃であり、すなわちクロンマックノイズ修道院を中心とする西部地域とアーマー教会やキルデア修道会を中心とする東部の間で振り子のベクトル

が揺れはじめることになって以降のことである。そしてそのベクトルが完全に逆転したのは、ヴァイキングによるダブリンの侵略と植民地化による新しい都市、すなわちダブリンを中心にした世俗化による商業都市の発生を待ってからのことである。

その意味で、ヴァイキングの歴史のはじまりが水辺のネットワーク、その極東の沿岸地域に位置する地点、リンデスファーン修道院であったことは歴史の皮肉であるが、このこと自体いかにも暗示的なものであるとみることができる。というのも、巡礼の修道僧である聖コロンバが有する水辺の思考、そのベクトルが果てるまさにその地点からもう一つの水辺の思考、それがはじまったということになるからである。そのベクトルは初期修道僧たちの思考のそれを逆説化するように、おもに東から西へと進路を辿っている。かくて光と影をなす二つの思考が、七九三年にこの地点、スコットランド極東に位置するリンデスファーン修道院、そこではじめて交わるようになった。言い換えれば、西の果てから昇った叡智の陽光、水辺の思考はヴァイキングの襲撃によって、東の果てに沈んでいったことになるのである。

## 五：ジャロウ修道院侵略

リンデスファーン修道院を襲撃した一年後の七九四年、ノルウェイ・ヴァイキングが次に標的に定めたのは、スコットランド東部の海岸線沿いに立つジャロウ修道院である。リンデスファーン修道院のある東海岸から南に下った場所にある修道院である。またしても彼らは、水辺のネットワークの果てる極東の沿岸の地点を狙ったことになる。ただしその修道院は、公式にはアイルランド系修道院ではなく、カトリック教会のベネディクト派修道僧によって創設されたものであるとされている。とはいえ、高柳俊一が適切に指摘しているように、この修道院は聖コロンバ系修道院の土台のうえに建てられたものであるとみてまず間違いはない。<sup>22</sup>このことは、『英国国教会』のなかにも暗示されているところでもあるが、とりあえずその根拠を以下列挙しておくことにする。

- 一) ジャロウ修道院の立地条件はリンデスファーン修道院のそれときわめて類似している点。
- 二) リンデスファーン修道院がのちにベネディクト派修道院の管轄に置かれるようになった経緯（このことについては「序章」において述べたとおりである）。
- 三) この修道院を象徴する二つの建造物、そのいずれもが河川（ウェア河とティレ河）沿い、すなわち水辺に建設されていることから、元来は水辺の思考を継承するアイオナ修道院あるいはリンデスファーン修道院、その精神的な影響下にあったと考えられる点（なお、二つの修道院の建造物は「双子の修道院」の異名で知られることから、各々を区分するために一方を「ウェアマス修道院」、他方を「ジャロウ修道院」と呼ぶこともある）。
- 四) ジャロウ修道院の僧侶であるベグダがリンデスファーン修道院を高く評価している記述がみられる点。

そういうわけで、アイルランド修道僧と水辺の思考を共有する〈フィヨルドの水賊たち〉にとっては、この修道院も聖コロンバ系修道院とみなし、それゆえ襲撃を試みたのではないかと推測される。おそらく、彼らはジャロウ修道院とリンデスファーン修道院を姉妹修道院であるとみていたのではあるまいか。

## 六：アイオナ、スカイ島、マン島修道院襲撃

ジャロウ修道院襲撃の翌年にあたる七九五年、ついにノルウェイ・ヴァイキングはスコットランドの西海岸に舵を取るようになった。すなわちアイルランド系修道院、その水辺のネットワークの要に相当する

聖コロンバのアイオナ修道院、そこが襲撃されることになったのである。その後、八〇二年、八〇七年にもこの修道院は襲撃を受けることになった。この経緯から判断して、ノルウェイ・ヴァイキングはこの修道院を重視したいと考えてよいだろう。

だが、ここで一つ疑問が浮かんでくる。かりに初期ヴァイキングたちが聖コロンバ系修道院に狙いを定めたのであれば、どうしてリンデスファーン修道院よりも先に、まずこの修道会の本拠地であるアイオナ修道院を襲撃しなかったのだろうか、というこの素朴な疑問である。その応えの一つは、すでにみてきた「ウィットビー公会議」に象徴されるイギリス教会との確執の経緯に求めることができる。

その際、この会議に前後してアイオナ修道院は次第に孤立していき、衰退していった経緯をまずは押さえておく必要がある。そこにはイギリスの都市化の問題も大いにかかわっている。というのも、イギリスはおおむね東部を中心に都市化し発展を遂げていったとみることができるからである。つまり当時（七世紀半）のイギリス教会にとって、もっとも脅威を感じていた修道院は、スコットランド北西部に位置することで都市の発展に取り残されていき、次第に孤立していったアイオナ修道院ではなかった。むしろ発展が著しい東部に位置するリンデスファーン修道院のほうにあったのである。だからこそ、「序」のなかで述べたように）彼らはジャロウ／ウェアマス修道院を建設するなど、この修道院を第一の標的に定めたいと、あらゆる対抗政策を次々に打ち出していった。それは裏を返せば、それだけこの修道院が繁栄をみていたことを証するものであるといえるだろう。だからこそ、初期ヴァイキングたちは最初にリンデスファーン修道院を襲撃したとみることができる。

とはいえ、チャールズ＝エドワーズも指摘しているように、アイオナ修道院がアイルランド海を挟んで拡がりを見せるアイルランド系修道会のネットワーク、その要（「飛び石」\*この表現はそのネットワークが陸路を前提としていないことを示唆している）であるとするならば、その襲撃はアイルランド系修道会にとっては致命的なものになったはずである。これにより水辺のネットワークは寸断されてしまうことになったからである。その後、修道院の建造物は建て直されたものの、その組織はベネディクト派やシトー派といったカトリック教会傘下の修道会の管轄に置かれることになった。だが当然、もはやそのネットワークは二度と復権をみることはなかったのである。

同年にアイオナ修道院の近隣にあるスコットランドで二番目に大きな島、スカイ島も襲撃されている。アダムナンによれば、この島で聖コロンバは異邦の民に洗礼を施したのだという。

だが、彼はこの島に修道院を建てることはしなかった。それはこの島が彼を支持するダリ・リアタ王国と敵対関係にあったピクトの王国の領土だったからである。一方、アイオナ島はダリ・リアタ王国の辺境に位置しており、そこに「治外法権＝逃れの場」としての修道院を設けることで二国間の衝突を回避できる、と王は考えたようである。そのためにこの地の修道院の創設を快く許可したのである。むろん、修道院をアジュールとしての役割を果たそうとするこの発想は王が独自に考案したものではなかった。それはアイルランド修道院独自のものであるといえる。したがって、その創設とその効用を王に進言したのは、聖コロンバであるとみてよいだろう。

それではどうして、この地に修道院が建てられることになったのだろうか。それはコロンバの弟子ドンナンが、「スカイ島に修道院を建てるべきではない」との師コロンバの助言を完全に無視して、そこに修道院を建ててしまったからである。案の定、その建設は「ピクトの女王の怒りに触れることになった。その結果、六一八年に修道院は襲撃され、焼き討ちにされたうえ、牧草地を現状復帰するよう命令を受けることになってしまったのである」（エリザベス・リーズ）<sup>23</sup>だがその後、ピクト人の多くが次第にキリスト教に改宗していったため、この島に教会が建てられ、その教会は聖コロンバ系修道会の影響を大いに受けることになっていった。

以上のような経緯を踏まえると、逆説的であるにせよ、スカイ島の修道院にも聖コロンバの影響があったとみることができる。

スカイ島の襲撃の後、その同年の七九五年にノルウェイ・ヴァイキングはマン島を掠奪している。この島についての最初の記述はアダムナンの『聖コロンバ伝』のなかにみられるものである。このことからわかるとおり、聖コロンバ系の修道院が建設されていたとまずは考えてよいだろう。さらにそれを裏づけるものとして、この島のアーボリー地区にある「聖コロンバ教会」を挙げることができる。そこでは、現在でも「聖コロンバの祝日祭」を盛大に祝う風習が残っている。一説によれば、『ケルズの書』はマン島で一時期製作されたのではないかともいう。

聖コロンバ系修道院で製作された『ケルズの書』を愛したジョイスが、ゲール語同盟のナショナリストを逆撫でもするかのようになり、あえてゲール文化の表象をアイルランド西部ではなく、逆にイギリス領のマン島に求めたことも（この点については、たとえば『ダブリン市民』「小さな雲」“A Little Cloud”にも暗示的に記されている）、この聖コロンバ系修道院ネットワークを想定するならば、うまく説明することができる。あるいは「死せる人々」における例のくんだり、「西の旅に出かける 때가来た。……」という表現の真意、それも東西に延びるこの水辺のネットワークの文脈を考慮するならば、ある程度理解することができるのである。

ちなみに、ジョイスは『フィネガンズ・ウェイク』のなかで、「マン島」と「ランベイ島」を半ば同列に置いて記しているのは—「彼はマン島になった。彼がランベイ島を好んだ理由などを……」、二つの島がヴァイキングの襲撃の対象になっていることを暗示させるためであるとも考えられる。

ただし、聖コロンバがこの島の修道院と具体的にどのようなかたちでかかわっていたのか、この点については依然として歴史的には不明な点が多く残っている。この点については、今後の研究課題にしなければならないだろう。なお、あくまでも私見であるが、現在ではイギリス領になっているマン島における聖コロンバの影響にかんする研究、それがあまり進んでいない一つの原因は、七世紀のイギリス教会による聖コロンバの排除政策、その名残とみることができまいか。領主が変われば、それに併せて、その地の歴史も変わるという次第である。

## 七：ヴァイキングによる初のアイルランド襲撃

ノルウェイ・ヴァイキングによるアイルランドへの襲撃がはじまった年は、アイオナ修道院襲撃と同年の七九五年であった。彼らはアイルランド海の北東部に浮かぶ小島、ラスリン島を襲撃した。イエイツが『アシーンの放浪』において暗示を込めて記した修道院が立つ場所である（「第八章」を参照のこと）。

ラスリン島は最初に聖コロンバが視察を行い、ここに簡易な修道院を創設したとされている。その後、五八〇年にバンゴール修道院の院長であった聖コムガル（Saint Comgall）が修道院を正式に建設し、さらにその後、六三〇年にシグニウス（Signius）が再建したものであるとされている。アダムナンによれば、聖コムガルは聖コロンバの弟子であったという。ただしこの見解に対しては異論もあるようだ。だが少なくとも、バンゴール修道院は聖コロンバゆかりの修道院であることから判断して、二人が水辺のネットワークで結ばれた知己を深めていたことだけは確かである。したがって以上の経緯から判断して、この島が聖コロンバ系修道会の強い影響のもとで建設されたものであることはほぼ間違いないところである。

同年の七九五年、ヴァイキングはダブリン沖に浮かぶ小島、ランベイ島を襲撃している。この島は六世紀半頃に聖コロンバによって初めて修道院が建設され、その後、聖コロンバの按手を受けた聖コールマン（年代からみて、この聖コールマンはリンデスファーン修道院の院長であった聖コールマンとは別人とみるべきである）がそれを引き継いで院長になったとされる。したがって、この経緯を踏まえて判断するな

らば、ランベイ島の修道院も聖コロンバ系修道院の一つであるとみることができるだろう。

後期ノルウェイ・ヴァイキングにかぎらず、海賊行為の王道的な戦術は本土に侵入するまえに、まず拠点となる小島を侵略することである。小島を完全に制圧したあと、戦力を整えて全土に侵入し、形勢が不利な状況に陥ちると、すぐさま小島へと退散し、次の奇襲に備えるという戦法を取るのが一般的である。つまり小島の侵略の目的はそこにある財宝ではなく、あくまでも本土侵略の中継地、拠点づくりにあったことになる。

だがすでに述べてきたように、初期におけるノルウェイ・ヴァイキングの襲撃はそのような戦略をとっていない。したがってこの度のランベイ島襲撃、その目的はスコットランドの小島の奇襲と同様に、この島自体を〈宝島〉とみなし、そこに秘蔵されている〈聖コロンバの財宝〉を奪うことであって、そこを拠点として本土に侵略することではなかったとみることができる。

その意味では、ダブリンへの襲撃がランベイ島襲撃のあと、十二年を経た八〇七年であったことに幾重にも注意したいところである。「注意したい」というのは、ランベイ島がアイルランド領であったことから、この島への襲撃がすなわち本土侵入の年と等価に置かれてしまうことによって、そこに錯覚が生じる恐れが大いにありえるからだ。事実、多くの歴史書にはヴァイキングのアイルランド侵略を七九五年と明記する一方で、八〇七年侵略を記さないか付随的に記しているようである。これにより読者に、この十二年間のタイムラグの存在を忘れさせ、あたかもこの島の襲撃がダブリン侵略と同年であるかのごとき誤解を生じさせる一要因をつくり出している。この点は学術的に大いに問題であるというべきだろう。

#### 八：初期ノルウェイ・ヴァイキングが聖コロンバ系修道院を狙った理由

ここで改めて意味をもってくるのが、アイルランドに先駆けて行われたノルウェイ・ヴァイキングによるスコットランドの掠奪、その軌跡である。彼らは水辺の思考に導かれるように、聖コロンバゆかりの修道院、あるいは彼の影響下にある修道院だけを標的にしている。その現実的な掠奪における最大の狙い、それは聖書の装飾写本であったと考えられるのである。

ラテン語が読めない異教徒である彼らにとって写本、一冊の書物がいかなる意味をもっていたのか、多くの者たちは疑問に思うことだろう。だが、そうではない。その価値は当時領地一つ分にも相当する財宝そのものだったからである。当時の王族たちは修道院に占有地を与えることと引き換えに写本の贈呈を求めたほどである。聖コロンバが起こした『詩篇』の盗写事件による著作権裁判をめぐる、国土を二分する決戦が勃発したことをここでもう一度思い出したい。一つの写本を完成させるまでに数十年、ときには数百年を要することもあった。したがってそれは、各修道院の威信をかけた一大プロジェクトであったとみることができる。

専門家が正確に計算したところによれば、『ケルズの書』に用いられる上質な子牛皮紙を取るためには、実に「一八五頭の生後三ヶ月未満の子牛」が用いられているという。しかも、すでに述べたように、その一八五頭の子牛は「一二〇〇頭以上」の子牛の皮のなかから厳選された上質の皮だけが用いられていたという。各修道院の周囲に牧草地が広がっていたのは一部そのためであったとも考えられる。あるいは各修道院は写字僧たちとともに有能な鍛冶職人たちを抱えていたのも、そのためであったとみることができるだろう。冶金の装飾技術は装飾写本の芸術様式と連動しているのであり、しかも写本を収める箱であるクムタクには宝石が散りばめられていたからである。修道院が水辺に面しているもう一つの理由をそこに求めることができるだろう。鍛冶場には熱を冷ますための大量の水を必要としたからである。

本来、「入江」の貿易商人であり、彼らのなかには祖国で冶金職人であった者たちも含まれていた。そのため彼らは、聖書の装飾写本の価値を十分に承知していたはずである。また貿易商という彼らの職業

柄、耳学による知のネットワークを通じて聖書の装飾写本制作の達人として知られる聖コロンバの存在を（その情報の真偽のほどがどうであれ）噂に聞いていたとみるのが自然な見方というものだろう。ノーマン・デイヴィズがいうように、八世紀までには、すでにイギリスに移住したノルウェイ人もいたことも看過すべきではない。その情報が彼らの耳に入らなかったと考えるほうがはるかに難しいのではあるまいか。つまり〈聖コロンバの影があるところ、そこに写本＝財宝ありき〉という噂、それが〈ノース・ネットワーク〉を通じて広く流布し、彼らの間で共有されていたと考えられるのである。なお、現代の専門家のほぼ一致した意見によれば、考古学的な検証を通じてスカンディナヴィア半島に住む民族が八世紀の前後にスコットランドに定住をはじめていたという専門家の指摘もあることを付記しておきたい（原証明、「スコットランドとヴァイキングー地名学・考古学的根拠による定住史の断章」を参照）<sup>24</sup>。

ただし歴史的にみれば、『ケルズの書』も『リンデスファーン福音書』も掠奪を免れている。ちなみに、ケルズの院長ブルスマックは『ケルズの書』の保管場所を教えなかったために拷問にかけられたあと殉教している。それほどまでに両者にとって聖書の装飾写本は貴重なものであったわけである。だが、ともかく彼らが最初のリンデスファーン修道院襲撃で味をしめ、以後コロンバゆかりの修道院にかぎって襲撃している経緯を考えると、彼らにとって財宝といえるようなものは、たとえば未完の写本やその付属品に用いられる宝石や子牛皮を含む様々な工芸品などであり、それらを対象に彼らは掠奪を行っていたと考えてほぼ間違いない。

### 九：初期ヴァイキングによるアイルランド西部襲撃

ヴァイキングのアイルランド海沿岸地域（極東）への襲撃、そこにばかりに注目が集まるために、アイルランド史研究の死角となっている問題がある。それは、ヴァイキングが東部のラスリン島とランベイ島を襲撃した同年の七九五年、彼らが北海／大西洋航路を經由してアイルランド極西部にある小島も襲撃しているという歴史的な事実である。スライゴーの海岸の沖に浮かぶイニスマーレイ島とゴールウェイの海岸沿いの湖畔に浮かぶイニスヴォーフィン島がそれである。

イェイツの詩にも言及されているイニスマーレイ島は、男女の修道院の建物、「蜜蜂の巣」が仲良く併存する島であることで広く知られている。その修道院は聖人伝説などによると、聖モライス（St. Molaise）が六世紀半頃（？）創設されたものであるとされているようである（ただし、この仮説には二人の生存年に隔たりがあることから多くの異論も出ている）。この地が聖コロンバの郷里に近く、聖コロンバによるネットワークの西の要に位置していることは看過できないところである。

この島が聖コロンバゆかりの場所であることは、この島に立っている「聖コロンバの石碑」からも確認することができる。その場所は「聖コロンバの詩」に表れる「クルキーネの浜辺」、その沖に浮かぶ小島である。つまりクルキーネの浜辺を挟んで差し向かいの一方の浜辺にイニスマーレイ島の修道院が、他方にベン・ブルベンの麓のドラムクリフ修道院が立っていることになる。浜辺を挟んで並び立つこれら二つの修道院、その関係はさながら〈合わせ鏡〉のそれようである。それは聖モライス（あるいはイニスマーレイ島の修道僧の一人である聖人 X）と聖コロンバとの関係を暗示しているような印象を強く受ける。以下に示す二人のエピソード（伝説）を思い出すならば、さらに強くそのような印象を受けることになるだろう。

先述したように、聖コロンバは僧侶の身でありながら、ドラムクリフ修道院が立つベン・ブルベンの麓でクール・ドゥレムネの戦いを指揮し、勝利した。だがその反面、多くの戦死者を出す結果を招いてしまった。このことに思い悩んでいた彼は罪を懺悔するために、イニスマーレイ島の修道院を訪ね、聖モライスに自身の罪を告白したのだという。つまり一人のドラムクリフの修道僧、その深く秘められた想いが

クルキーネの浜辺の対岸にある一人のイニスマーレイの修道僧、その心の鏡に映し出されたということになるだろう。懺悔したあと、贖罪のために聖コロンバは自身の身を<sup>エグザイル</sup>国外追放し、やがてアイオナの地に辿り着くことになった。そうだとすれば、アイオナ修道院の原点はアイルランド極西の地、イニスマーレイ島の修道院とドラムクリフ修道院、あるいは二つの修道院の〈際〉に存在しているとみることができるだろう。

そうだとすれば、彼が構想したネットワークの出発点と彼の亡きあとのその到達点、すなわち西と東の要に位置づけられ二つの修道院は、七九五年に同時にヴァイキングによって襲撃されたということになる。しかも八〇七年という同じ年に、これら二つの修道院は再び襲撃されている。この歴史的な事象、そこに必然性がなかったと考えることはかなり難しいのではあるまいか。その同年にゴールウェイの海岸沿いの湖に浮かぶイニスヴォーフィン島も襲撃を受けているという事実をも考え合わせてみるならば、さらにそうやってよいだろう。

イニスヴォーフィン島の修道院の創設は比較的新しいものであり、それは六六七年に聖コールマンによって建てられたものである。その際、彼はリンデスファーン修道院の多くの僧侶たちを引き連れて、ここに居住している。この点は聖コロンバ系修道会のネットワークの問題を考えるうえで、きわめて示唆的なものである。というのも、彼らがこの地に修道院を建てようと計画したその理由は、六六四年のウィットビーの公会議、そこでの判決に直接関係しているからである。

アイオナ修道院の修道僧であったアイルランド人聖コールマンは、六六一年にリンデスファーン修道院の第三代修道院長に就任している。この経歴からもわかるとおり、彼は聖コロンバ直系の修道僧の一人であった。彼はこの修道院の初代院長、先述の聖エイダンあるいは聖コロンバの意思を汲み、リンデスファーン修道院を〈東のアイオナ修道院〉とみて、スコットランドの東西を知のネットワークで結び、さらにそれをアイルランド全土と結ぶ壮大なネットワーク構想を想い描いていたことだろう。

だが「第一章」で述べたように、この構想を〈知のヴァイキング行為〉だとみるイギリス教会は、六六四年のウィットビーの公会議を開催し、聖コロンバ系修道会をイギリス全土から一掃することを計った。その際の最大の標的がこの修道会の東の牙城、リンデスファーン修道院であったわけである。

当然のことながら、この公会議の判決に対して、彼は反対の意思を表明した。だが、その意見はまったく聞き入れられることはなかった。そこで彼は自身の意思を明白にするために修道院長の職を辞任し、彼に賛同する多くの修道僧たち（イギリスの修道僧三〇名と多くのアイルランド修道僧たち）とともに、この地を離れ、聖コロンバ系修道院ネットワークの原点、アイルランド極西の地域に回帰する道を選んだのである。つまり〈原点回帰による再出発〉、それがこの島に修道院を創設した彼の情熱の想いであったということになるだろう。彼がアイルランドに立つまえに、アイオナ修道院を訪問しているのは、この決意表明を知らせるためであったと考えられるからだ。彼のとったこの行動を積極的な意味で受けとめるならば、それは彼が精神の師と仰ぐ聖コロンバが心の奥底に封印した帰郷への想い、それを代弁するものであってもいえるだろう。こうして師の魂は、一人の弟子の身体を借りることをとおして水辺のネットワーク、その原点に帰郷することができたということになるだろう。

だが残酷にも、歴史は師と弟子の切なる想いを打ち砕いてしまった。ヴァイキングの誕生を歴史にしるしづける〈七九三年のリンデスファーン修道院襲撃事件〉、それに続く七九五年のイニスヴォーフィン島修道院襲撃事件、これら二つの事件は水辺のネットワークの東西の要を断ち切ってしまう結果をもたらしたからである。

この事件もまたたんなる偶然の産物とみることはできないのである。『英国国民教会史』（バーダ、一九二―三頁参照）にも記されている聖コールマンの辞任、この一大事件が周到な計画のもとで最初の標的を



ンデスファーン修道院に定めたヴァイキング、その耳に届かなかったはずもないと考えられるからだ。彼らとその修道院長を辞任して新しく創設したこの修道院の存在も同様にそうである。聖コールマンの修道院長辞任表明とその後の彼の足取り、その噂は千里を走ったと推測される。繰り返すことになるが、彼らはそもそも異国の情報収集に長けた貿易商人であったことを忘れてはなるまい。彼らは独自のいわば〈知のヴァイキング・ネットワーク〉を通じて、次の標的としてこの小島を定めたと考えるべきだろう。

アイルランドには海岸線に浮かぶ小島は無数に存在している。その小島を拠点に本土を侵略する方法をとらなかった初期ノルウェイ・ヴァイキングは、場当たりにアイルランドの小島を襲撃したわけではなかった。したがって当然のことながら、その襲撃は計画的に行われたとみるべきであり、その数は必然的にかなり限定されたものとなるはずである。そういうわけで、そのなかの一つの小島、それがたまたま彼らにとっての「宝島」であるイニスヴォーフィン島であったと考えることはまずできない。

先述の『英国教会史』のイニスヴォーフィン島の記述、そこには逆説的ではあるが、聖コロンバ系修道院による水辺のネットワークの存在を暗示する興味深い一節がある。それは「蟻とキリギリス・イングランド人とスコット人」という表題が掲げられたこの書の「第四巻」4の以下のものである。

この間スコット（アイルランド）出身の司教コルマンはブリタニアを去ったが、その際にリンデスファーン島で集めたスコット人全部と約三十人のイングランド出身のイングランド人たちを連れていった。いずれの者も修道院生活の規律によって十分に修練されていた。コルマンは数人の兄弟たちを教会に残してアイオナ島に向かった。彼はかつてイングランド人に神のこぼを説くためにそこからブリタニアに派遣されていたのである。

それから、アイルランドからかなり離れたイニスヴォーフィン、つまり白い子牛と呼ばれる小さな島へ去った。この島に到着するとただちに修道院を建設し、両部族から集めていった修道士たちをそこに定住させた。しかし、両者はたがいに統一と調和をもって生活することができなかった。それというのも、スコット[アイルランド]人は収穫物を集める夏に修道院を去って、自分たちの見慣れた地域を放浪し、しかも冬になると戻ってきて、イングランドがその労働によってたくわえを共通に使用しようと要求したからである。コルマンはこの不和と不一致の解決策を求めて多くの場所を訪れ、ついに修道院建設に適当で、スコット人のこぼでメイオと呼ばれる地をアイルランドに見つけた。……修道院を建設してイングランド人をそこに残し、スコット人は先に述べた島に残した。この修道院は今日まで、イングランド住民によって保持されているが、当初の小規模な状態から拡張されて、いっそう適切な規律のもとに統轄され、その結果高潔な修道士たちが各地からつぎつぎと集まった。<sup>25</sup>

ここにはすでに「序章」で言及したように、ベーダのアイルランド（スコット）系修道僧たちに対する両義的感情が端的に表れている。一方で、彼はここに表れているリンデスファーン修道院の院長であった「コルマン」（聖コールマン）や「エイダン」に対する大いなる尊敬の念を抱いている。だが他方において、カトリック教皇グレゴリウスの命を受けてイギリスに派遣されたアウグスティヌス大司教（ヒッポの聖アウグスティヌスとは別人）、彼がアイルランド系修道僧に対して命じた（すでに述べた復活祭の暦などにかんする）改善命令に服従しようしない彼らの頑な姿勢に対して、彼は不信感を露わにしている。そればかりか、彼らが彼の命令を拒否し、イングランド王エゼルウルフにより殺害されたことに対して、彼はいっさい同情を示していない。それどころか、むしろそれを神の峻厳なる裁きのしるしであると考えられているのである—「聖なる大司教アウグスティヌスの預言は果たされ、永遠の救済の説得を拒んだ不信仰な者たちは現世的破滅の報復を受けたのである」。<sup>26</sup>

彼にとってのアイランド系修道会の負の表象、その体現者こそ聖コロンバであったとみることができ。その最大の根拠は、「コルマン」と「エイダン」の精神の父である聖コロンバの名、それが『英国国民教会史』にいったい言及されていないこと、ここに求めることができる。ベーダが彼の名声を知らないはずもないことを考えると、この書物における彼の不在は意図的な排除とみるのが道理というものである。

このことは、先の引用文からも窺い知ることができる。「コルマンは数人の兄弟たちを教会に残してアイオナ島に向かった」、この一文に注目したい。ここで「アイオナ島」と記している以上、ベーダは聖コルマンが聖コロンバ系の修道僧の一人であったことを十分に承知していたことに疑う余地はない。このことはそれに続くくだり、「彼はかつてイングランド人に神のことはを説くためにそこ〔アイオナ島〕からブリタニアに派遣されていたのである」に示唆されているとおりである。それにもかかわらず、彼は「アイオナ」を「島」と呼ぶことにとどめ、それをこの書物のなかの他の「アイオナ島」に言及した箇所を含めて、「修道院」とは呼ぶことを控えているし、そこに修道院があったことや、その創設の経緯についていったい記していない。むしろ、『英国国民教会史』のなかで、ベーダは「～修道院」と記すことなく、ただ地名だけを記している箇所も散見されることは事実である。ただしその場合でも、その場所が修道院であることがわかるように、そこで修業する修道士たちの姿やその生活ぶりを、「アイオナ島」以外の記述においては忘れずに彼は描いている。これに対して、「第一章」ですでに引用したように、「アイオナ島」については、そこに住み着いた修道士たちが「主のご托身から七百十六年……神に愛されたエグベルトの敬虔な勧告を受けて自分たちの慣習を変える」まえば「叡知にもとづくものではない」教えにしたがう「島」であったと記しているのである。

さらになんとも奇妙なことだが、その修道院の創設者にして、彼の精神の師に相当するはずの聖コロンバ、彼についてはいったい触れていない。あるいは彼らがアイオナ系の修道僧（彼らの母校はアイオナ修道院）であったこと、この点についてもいったい記していないのである。

この引用文に明記されているのは、勤勉で「規律」を守る「三〇人」の「蟻」としてのイギリス人修道僧たち」に対して、「夏」の間まったく働きことをしないで、ちゃっかりと「冬にたくわえを要求する」「キリギリス＝スコット（アイランド）人修道僧たち」の姿である。しかも彼らに対しては、あたかも十把一絡げにでもするように、「リンデスファーン島で集めたスコット人全部」としているだけで、彼らの人数を記していない点も気にかかるところである。

そこに裏書きされているものは、ベーダが聖コロンバの〈悪弊〉であるとみている「放浪」であるとみてよいだろう。つまりベーダは、彼あるいは彼らの弟子たちの放浪という習性を、夏の間歌い遊び惚ける「キリギリス」の悪弊としてしかみていなかったということになるだろう。あるいは「放浪」が聖コロンバ系修道僧たちにとって水辺のネットワークづくりのために不可欠な巡礼であったこと、この点についても彼はまったく理解していなかったことになるだろう。しかも、この引用文には「自分たちの見慣れた地域を放浪し」、すなわち聖コルマンを含めて、彼らがこの地域の出身者たちであったことも示唆されているのである。

かりにベーダが「キリギリス」という表現を「歌い惚ける」者の比喩として用いているとするならば、その表現は見方を変えれば、アイランド修道僧が勤勉な「アリ」としてのイギリス修道僧にはない特殊な才能、すなわち音楽や文学を含めた芸術の才に恵まれていたこと、すなわち彼らが半ばさすらいの吟遊詩人としての伝統を受け継ぐ者たちであったことを証していることにもなる。だからこそ、みずからの大いなる職務を果たした彼らは正当な報いを要求したのではあるまいか。

引用文には「いずれの者も修道院生活の規律によって十分に修練されていた」という記述があることからわかるとおり、放浪という悪弊あるいはドルイド教的な風習を除けば、ベーダはスコット人修道僧た

ちのことを、かならずしも悪く思っていなかったようである。「いずれの者も修道院生活の規律によって十分に修練されていた」という一文からも、このことは窺い知ることができる。だがそれにもかかわらず、「スコット人は収穫物を集める夏に修道院を去って、自分たちの見慣れた地域を放浪し、しかも冬になると戻ってきて、イングランドがその労働によってたくわえを共通に使用しようと要求した」と述べられている。そうだとすれば、このくだりには彼らがノルウェイ・ヴァイキングと同じような行動パターン（初期ノルウェイ・ヴァイキングは寒い時期は航海しない）、すなわち水辺の思考を同じくする者たちであったことまでもがひそかに示唆されていることになるだろう。その意味で、この文面は水辺のネットワークの存在を二重の逆説によって証するものであるといえる。

以上、アイルランド修道僧たちと水辺の思考を共有する初期ヴァイキング、彼らの掠奪経路の方から逆説的に水辺のネットワークのあり方の問題を考えてみた。この試みは同時に、そのネットワークの見取り図を作成する企図のもとで行われたものである。

この作業を通じて、それがいかに簡易的なものにすぎないにしろ、水辺のネットワークの外観をある程度描くことができたのではないかと考えている。少なくとも、この企図によって一つの注目すべき命題が顕在化されたのではないかと考えられる。それは、水辺のネットワークを予め構想した最初の人物、それが聖コロンバにほかならなかったということである。

## 註

1. Richard Hall, *Exploring the World of the Viking* (London: Thames&Hudson, 2007), p.8参照。
2. Richard Hall, pp.58-65参照。
3. Howard B. Clarke, Sheila Dooney and Ruth Johnson, *Dublin and the Viking World*(Dublin: The O'Brien Press, 2018), P.17参照。
4. *Dublin and the Viking World*, pp.17-21.
5. *Dublin and the Viking World*, pp.18-9.
6. *Dublin and the Viking World*, p.28参照。
7. 海野弘『海賊の文化史』（朝日新聞出版社、2018）、三〇-六参照。
8. Charles=Edwards, pp.586-99参照。
9. Charles=Edwards, pp.588参照。
10. *The Vikings*, p.14.
11. 海野弘、三三頁。
12. マーティン・W. サンドラー『大西洋の歴史』、一二頁。
13. 海野弘、三四頁。
14. 海野弘、三二頁参照。
15. 海野弘、三八-九頁参照。
16. Richard Hall, pp.72-4参照。
17. Elizabeth Rees, p.166参照。
18. Charles=Edwards, p.9 25, 314-7参照。
19. ベーダ 高橋博訳『英国国教会史』（講談社、2008）- 四二頁参照。
20. Charles=Edwards, p.9参照。
21. Charles=Edwards, p.290参照。
22. 『精神史のなかの英文学』、七九頁参照。
23. Elizabeth Rees, p.115参照。
24. 原征明「スコットランドとヴァイキングー地名学・考古学的根拠による定住史の断章」『東北学院大学』経済学論集 一二六号、1994年 九-一八頁参照。
25. ベーダ、一九二-三頁。
26. ベーダ、七八頁。